

アフリカ諸国でのプラ製包装禁止政策の課題として、法の十分な施行、利害関係者による抵抗、および代替品の限定的な存在が指摘されている [Nyathi and Togo 2020]。一方、ルワンダのプラ製包装禁止政策の成功要因として、観光業など外部セクターに依存するサービスベースの開発戦略、および地域の環境政策を先行する政治的意図が指摘されている [Behuria 2021]。こうした議論に考えを巡らせつつ、私はベナンでトウモロコシの固粥を濃いソースにつけながら思った。多様な副材料を用いないルワンダの食文化では、少量ずつの液状・粒状の商品を購入する習慣が生まれにくく、結果としてプラ製包装の必要性が低かったことも、同国の禁止政策の成功を支えた可能性はないだろうか？

引用文献

- Babayemi, J. O., I. C. Nnorom, O. Osibanjo and R. Weber. 2019. Ensuring Sustainability in Plastics Use in Africa: Consumption, Waste Generation, and Projections, *Environmental Sciences Europe* 31(1).
- Behuria, P. 2021. Ban the (Plastic) Bag? Explaining Variation in the Implementation of Plastic Bag Bans in Rwanda, Kenya and Uganda. *Environment and Planning C: Politics and Space* 39(8): 1791–1808.
- Danielsson, M. 2017. The Plastic Bag Ban in Rwanda: Local Procedures and Successful Outcomes—A Case Study on how Rwanda Implemented a Nation-wide Ban on Plastic Bags. Master thesis, Uppsala University.
- Nyathi, B. and C. A. Togo. 2020. Overview of Legal and Policy Framework Approaches for Plastic Bag Waste Management in African Countries, *Journal of Environmental and Public Health* 2020.

フィリピンの独立活動家たち

瀬名波 栄 志 *

どのように人々は活動家になるのだろうか？筆者が専門とする社会運動研究（正確には資源動員論）はデモが発生するメカニズムを明らかにする研究分野であり、社会運動組織に注目することが多かった。たとえばどのように社会運動組織が協力し合ってデモを組

織したのかを明らかにする、といった具合である。一方、近年の社会運動を見渡すとむしろ組織に参加していない人々が組織・参加した運動が目立つ。2010年代初期のアラブの春やスペインのインディグナス運動、アメリカでのオキュパイ運動では特定の社会運動組

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

織に参加しない人々がSNSや個人的なネットワークを通じて運動を組織した。おそらくこうした「ネットワーク型の運動」[e.g. Bennett and Segerberg 2012]を通して「活動家」の内実ないし定義も変化しているのではないだろうか。

こうしたネットワーク型の運動の台頭はフィリピンでも例外ではない。フィリピンではかつてカトリック教会が社会運動組織として力をもっており、カトリック教会の枢機卿が1986年2月に呼びかけた非暴力の大規模なデモ「エドサ・ピープルパワー革命」(写真1)を通じて独裁政権(1972-1986)が打倒され、民主化した。この民主化革命から20年以上経った2010年代からは特定の社会運動組織に必ずしも所属していない人々が大規模な社会運動を組織し始めている。2013年8月に汚職スキャンダルをきっかけとしてSNSで呼びかけられた反汚職運動「ミリオン・ピープル・マーチ」には10万人以上が参加した。この運動を呼びかけ組織したブレターニャ氏は特定の社会運動組織に所属していない無所属の活動家であった。こうした人々は何のきっかけで活動家に転身し、自主的に運動を組織もしくは運動に参加し始めたのだろうか。社会運動研究においては、いかに活動家が誕生するのかはあくまでサブテーマでしかなかった。ゆえにここでは、教会や労働組合といった社会運動組織の構成員ではなく、一般市民が無所属の活動家、いわば「独立活動家」として形成される過程を紹介したい。これまでの活動家インタビューの経験上、独立活動家になった人々は必ずしも

政治的な話題を話す家庭に生まれたわけでもない。また、兄弟姉妹のなかで唯一の活動家であるというケースも珍しくない。ある個人が独立活動家になるメカニズムは一般化することが難しく、先行研究も少ない。よってここではフィリピン社会においてある個人が独立活動家になる経路をいくつか紹介する。

独立活動家の定義を確認しておこう。独立活動家はなんらかの政治組織に所属していないものの、これまで複数回なんらかの抗議行動などに参加した経験がある人々と定義する。活動家は一般的には政治運動に参加する人々のことを指すが、フィリピン社会においてはボランティア活動など必ずしも政治的でない活動に従事する人々を含むこともある。一方で、フィリピン社会において活動家にはネガティブなイメージも付き纏っており、テロリストと同一視されることも少なくない。また筆者自身、進んで自身を社会運動研究者と紹介することは避けてきた。こうしたスティグマに抗いながら独立活動家になれるのは必然的に中間層以上かつ高学歴層が多く、これまでインタビューをしてきた70人以上の独立活動家も同様である。また、独立活動家であることは専従活動家に比べて大きなコミットメントを必要としない。独立活動家であることは、必ずしも先進国並みの中間層とはいえない彼らがプライベートと社会貢献を両立させられる生き方なのである。以下では人々が無所属の活動家になる主な3つの経路、1. エドサ革命による正義の貫徹、2. 大学での社会運動経験、3. 終わらない構造的な腐敗、を紹介したい。



写真1 エドサ革命記念日（2月25日）をエドサ教会前で祝う人々

1. エドサ革命による正義の貫徹（写真1）

独裁政権とエドサ革命による民主化を経験したことは政治体制だけでなく、市民社会に大きな影響を与えている。ある調査によれば今でも人口の6割以上が「エドサ革命の魂は今も生きている」と信じている[SWS 2023]。非暴力的なデモによって独裁政権を打倒したという正義のストーリー「ピープルパワー物語」は広く受け入れられ、民主化後のフィリピン市民を「正義を求め、社会を変えられる主体」としてエンパワーした。1969年生まれの独立活動家の男性のルフィ氏は16歳でエドサ革命を目撃しており、エドサ革命では正義が達成されたと述べる。エドサ革命で達成された正義を自分も貫くため、積極的に民主化後の反汚職運動にも参加し始めたという。

「もし自分を表現するなら、必ずしも政治的に意識が高いわけじゃないけど、ただ、正義を求めている人間だ。」（2024年10月7日）

事実、こうした「正義」のストーリーは他の独立活動家からも聞くことができた。独裁政権下の不正義がエドサ革命によって正されたことは、革命をリアルタイムで目撃した人々に強い影響を与えたに違いない。

2. 大学での社会運動経験（写真2）

フィリピンには社会運動が盛んな大学が幾つかあり、なかでも「BIG4」と呼ばれるフィリピン大学（写真2）、アテネオ大学、デラサール大学、サントトマス大学では学生運動が非常に盛んである。もちろんこれらの大学では左派組織に所属する学生による運動も盛んであるが、学友に連れられてなんとなくデモなどに参加する無所属の学生も多い。先に触れた反汚職運動「ミリオン・ピープル・マーチ」の組織者のほとんどは無所属の活動家であったが、彼らのほとんどはフィリピン大学、アテネオ大学出身者であり、かつ学生時代になんらかのデモに参加した経験があった。1964年生まれの独立活動家の男性のラザティン氏はフィリピン大学に通うと当然のように活動家になると語る。

「私はフィリピン大学に通っていたんだ。で、フィリピン大学に行くと、まあ大体、そう（活動家に）ならざるを得ないんだよ。何か不正を見たら正さずにはいられない



写真2 フィリピン大学ディリマン校
筆者が学部時代に留学生、そして博士課程の期間
に専門研究員として所属した大学でもある。

いんだ (…)。だから大学卒業後、アメリカに約 8 年住んだ後も、帰国した時には何かしらのアドボカシー活動に関わりたと思っていた。結局は政治や政府に関わる必要があったんだ。」(2024 年 7 月 14 日インタビュー)

フィリピン大学は今でも学生運動が盛んであるが、その背景には独裁政権下で苛烈な弾圧を受けたことがある。フィリピン大学では独裁政権下の記憶が今なお世代を超えて引き継がれており、大学の授業やセミナー、活動家の知り合いを通して政治に目覚める学生は少なくない。



写真3 ワンピースの海賊旗を反汚職デモで掲げる若い抗議者

3. 終わらない構造的な腐敗 (写真 3)

先に述べたようにフィリピンでは大規模な反汚職運動が行なわれており、具体的には 2001 年には 25 万人以上が参加した大統領反対運動「エドサ 2」、2013 年に 10 万人以上が参加した反汚職運動「ミリオン・ピープル・マーチ」が行なわれた。直接的な因果関係があるとはまではいえないものの、前者は大統領辞任に、後者は汚職の原因となった制度の廃止へとつながった。しかし、市民は何度デモに参加しても終わらない構造的な腐敗に苛立ち続けている。変わらないフィリピン社会に疲れてデモへの参加をやめる人々も多い

一方、構造的な腐敗はエドサ革命をリアルタイムで目撃していない若者を新たな独立活動家へと変え続けている。

2025年9月21日、マニラ首都圏では治水事業の汚職に抗議する大規模な反汚職デモが行なわれ、8万人以上の市民が運動に参加した。この反汚職デモはエドサ・ピープルパワー革命のスタイルも引き継いでいる。たとえばデモの開催場所のひとつは革命の発信源のエドサ教会であり、かつて革命に尽力した左派やリベラル、カトリック系の組織の参加も目立った。また、このデモはインドネシア、ネパールで起こった国際的な反汚職デモの流れも汲んでおり、若い参加者が掲げるのは漫画「ワンピース」に登場する海賊旗である（この旗は作中では「解放」を意味しており、主に若者のデモ参加者が掲げる旗となっている）。地方の大学からこのデモに参加したある若者の女性参加者にインタビューしたところ、反汚職運動に参加するのは人生で初めてだという。

「汚職に苛立っている。ただ、これだけの人がデモに集まっているのを見られて嬉しい。」

彼女は、ある種矛盾する感情を吐露した。もう一度参加したいかと聞くと参加したいと笑顔で答えた。彼らのような若者が独立活動家になり、今後もフィリピンの反汚職運動を支えていくのだろう。

おわりに

社会運動研究では社会運動が何度も繰り返される社会のことを「社会運動社会」[Meyer and Tarrow 1998]と呼ぶ。フィリピンも社会運動社会なのだろうが、伝統的な社会運動組織が衰退している、という話を研究者と活動家双方からよく耳にする。確かにそれは悲劇であろう。しかし、独立活動家たちはデモを生み出し続けている。たとえばタクシーに乗って反汚職デモに出会った際、運転手に「デモに興味はありますか？」と聞くと、「時間があれば参加したい。人々がデモに参加するのは権利だし、この国の腐敗は本当に酷い」という返答が返ってきた。ともすればこの国の人々は時間と金の余裕さえあれば誰しも独立活動家になる可能性を秘めているのではなかろうか。必ずしもなんらかの政治組織に所属せずとも運動に参加できることを独立活動家たちは証明し続けている。

引用文献

- Bennett, W. Lance and Alexandra Segerberg. 2012. The Logic of Connective Action: Digital Media and the Personalization of Contentious Politics, *Information, Communication & Society* 15(5): 739–768.
- Meyer, David and Sydney Tarrow eds. 1998. *The Social Movement Society: Continuous Politics for A New Century*. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.
- Social Weather Stations (SWS). 2023. Social Weather Report: 62% of Filipinos say the Spirit of the EDSA People Power Lives. <https://www.sws.org.ph/swsmain/artcldisppage/?artcsyscode=ART-20230223072809&mc_cid=505f5b8f13&mc_eid=1eeec26a57> (2025年10月28日最終アクセス)